

■エッセイ

■実習船「かもめ」

館長 中山 敏

■奇跡のボート

平成25年4月下旬、岩手県立高田高等学校の横田校長から電話が入りました。「海洋システム科の実習船がアメリカに漂着し返却の申し出があった。実習船の大きさは5～6mで、海上輸送費は日本郵船が支援してくれるが陸上輸送費は目処が立っていない。本校では使用できないので被災資料として博物館に収蔵できないか」との相談内容でした。

実習船は、平成23年3月11日の東北地方太平洋沖地震に伴う大津波によって、陸前高田市から2年以上太平洋を漂流し、約8,000km離れたアメリカ合衆国カリフォルニア州クレセントシティの海岸に漂着したものです。北太平洋海流、

カリフォルニア海流に乗って流れ着いたと推測されます。

聞くとところによると、地元のテルノーテ高校の生徒が付着した貝などを剥(は)ぎ取り、返却に向けて募金活動等を行っているとのことでした。

■返還そして対面

当館では被災資料の安定化処理・修復作業を行っており、博物館資料として活用できないか職員と相談しましたが収蔵スペースがないこと、高田高校の生徒・卒業生にとっては愛着のある実習船でもあることから地元の博物館に収蔵することが望ましいと考え、陸前高田市立博物館に打診しました。陸上輸送費の問題さ

えクリアできれば収蔵したいとのことでした。同年6月上旬、横田校長から「課題であった陸上輸送費は郵船ロジスティック(株)の支援を得て、陸前高田市立博物館(旧生出小学校)で保管することになった」旨の報告を頂きました。

実習船「かもめ」は、関係機関のご支援を頂き2年7ヶ月ぶりの同年10月22日に陸前高田市に里帰りしました。その後、同年11月にはキャロライン・ケネディ駐日大使が、平成26年2月中旬にはテルノーテ高校の生徒が陸前高田市を訪問し、高田高校の生徒と交流したことは新聞紙上で紹介されております。

私は、平成26年8月1日に陸前高田市立博物館で開催された被災文化財の安定化処理ワークショップの際、実習船「かもめ」を初めて見る事ができました。その後、東京国立博物館本館正面玄関入り口で今年の1月13日、雪の降った1月30日の2回、実習船「かもめ」と対面しました。盛岡に戻って、漂着したクレセントシティが気になって仕方ありませんでした。

■クレセントシティ

クレセントシティは、カリフォルニア州最北西部テルノーテ郡の中心都市で北緯41度45分(陸前高田市は岩手県最南東部の北緯39度1分)に位置しています。市内をエルク川が流れ、南部には砂浜が形成されています。気仙川が流れ、高田松原の砂浜を有する陸前高田市が思い浮かびます。

ケッペンの気候区分によるとクレセントシティの気候は、夏乾燥冬温暖(7月の平均最高気温18度、降水量10mm。1月の平均最低気温4度、降水量258mm)の地中海性気候に区分されますが、年降水量は約1,700mmと多いで

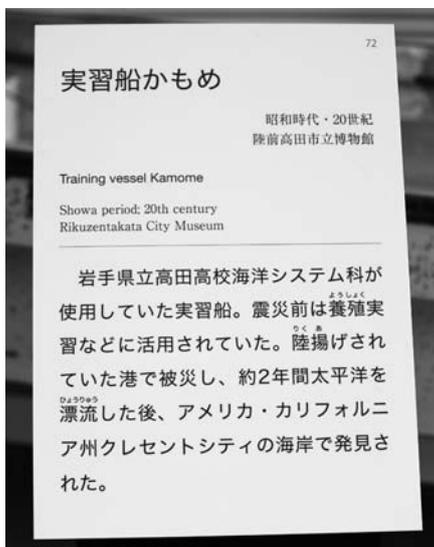


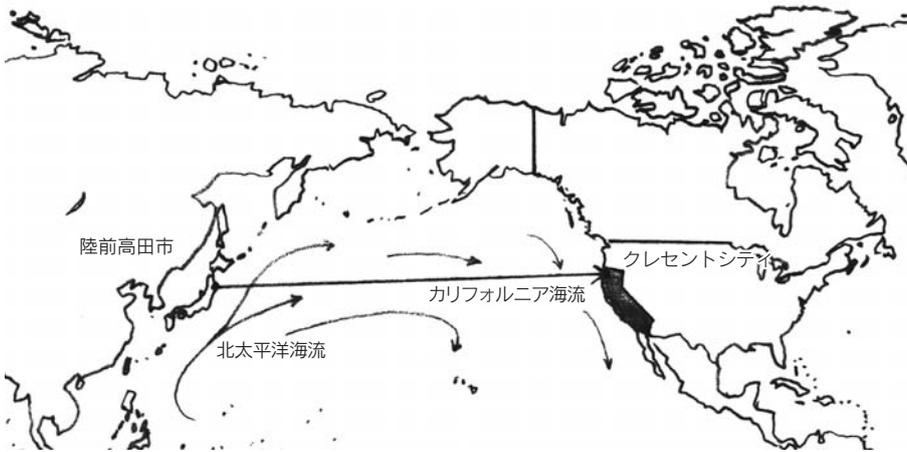
写真1 実習船かもめ



写真2 海をこえて結ばれた絆



写真3 全長約533cm、幅176cm、高さ67cm、重量0.6t FRP製



地図1 陸前高田市とクレセントシティの位置



地図2 カリフォルニア州内のテルノーテ郡の位置



地図3 テルノーテ郡内のクレセントシティの位置

す。陸前高田市の位置する気仙地方(7月の平均気温21.1度、降水量412mm。1月の平均気温-0.4度、降水量26mm)は温暖湿潤気候に区分されます。しかし、年降水量は約1,300mmと少なくクレセントシティの方が多状態です。気仙地方は岩手の湘南と呼ばれ冬温暖な地域ですが、高緯度に位置するクレセントシティの方が冬は温暖です。

市域面積は5.3km²で、テルノーテ郡の面積は3,186km²。市の人口は7,643人、郡人口は28,610人です(2010年)。陸前高田市は面積232.29km²、人口19,308人です(2014年)。市内の高校並びに博物館は両市とも1校・1館です。交通等の社会資本や銀行、ホテル、映画館、百貨店等の数を比較するとクレセントシティの中心地機能が充実しており、

陸前高田市より大きな町と推定されます。周辺には国立・州立の公園が分布し、自然に恵まれた陸前高田市に似た地域です。

調べてみて何よりも驚いたのは、クレセントシティも幾度となく津波被害を受けていたことです。最も大きな被害は、1964年のアラスカ州アンカレッジ沖の地震に伴う津波です。死者12人、多数の行方不明、100人以上の負傷者、破壊された建物289棟、25隻の大型漁船と1,000台の自動車が進んでいました。今回の東北地方太平洋沖地震による津波は、最大約2.5mの高さで到達し、死者1名、35隻以上のボートを破壊しています。海岸地形や市内を流れる川が存在など津波被害が拡大する要素は、太平洋を挟んで位置する陸前高田市と共通

しているのです。このような背景からテルノーテ高校生の活動、そして実習船「かもめ」の返還に繋がっていることを理解することができました。

■博物館資料の意義

実習船「かもめ」を通してクレセントシティに興味を抱き、その特色を調べ、陸前高田市との比較から地域性を考察し、人びとの活動の一端に触れることができました。

平成27年3月11日に東京文化財研究所セミナー室で開催されたシンポジウム「文化を守る絆—津波被災文化財再生への挑戦」に参加しました。プログラムの最後に実習船「かもめ」の返還に関わったハンブルト大学津波研究センター教授(地理学)ロリー・テングラー氏、テルノーテ高校前校長コリーン・パーカー氏、岩手県立高田高校長横田昭彦氏のビデオメッセージが紹介されました。太平洋を挟んだ日米高校生の思いと活動に対して理解を深めることができました。

テルノーテ高校と高田高校の交流は、太平洋に友情の橋を架けました。これを契機にクレセントシティと陸前高田市が友好都市として絆を太くし、更なる交流が図れることを願います。

このように博物館資料の一つ一つにはドラマがあり、自然と人間が関わっています。展示資料は見るものの視点や感性によって様々な情報を提供し、未知の世界に誘ってくれます。新たな探求心を掻き立ててくれるのです。

参考文献

津波により被災した文化財の保存修復技術の構築と専門機関の連携に関するプロジェクト実行委員会編：「安定化処理」pp.235 (2014年12月26日発行)